

# 国際ダブルリード協会 第38回コンファレンス

●特別レポート

## 7

月21日から25日までの5日間、英国・バーミンガム市立大学付属のバーミンガム・コンセルヴァトワールを主会場に、国際ダブルリード協会（IDRS）の第38回コンファレンスが開かれた。米国に本部を置くIDRS（会長：ナンシー・キング）のコンファレンスが英国で行われるのは1980年（エジンバラ）、1989年（マンチェスター）に続いてこれが3度目。ちなみに英国ダブルリード協会の創立は1988年である。

ウエスト・ミッドランド州にあるバーミンガム市は、産業革命以来発展した人口約100万の工業都市。英国第2の都市規模を近くマンチェスター市と競い合っている。主会場のコンセルヴァトワール、シンフォニーホール、バーミンガム博物館、タウンホール、バーミンガム・ミッドランド・インスティテュート（BMI）、楽譜・楽器の展示場など合計11の会場と多くの

ホテルが近接して点在して便利だった。北緯52度28分のバーミンガム市は夜遅くまで明るく、セキュリティ面の問題もなく、深夜、終演後のホテルへの徒歩移動もきわめて安全だった。会期中の平均気温は日中20度、夜は10程度。酷暑の東京に比べ、嘘のように過ごしやすいコンファレンスとなった。

当初、世界的な不況の影響で参加者数の減少が心配されたが、最終的には欧米、アジアから6200人の参加者を得て例年通り活気溢れるコンファレンスとなり、38年の歴史を誇るIDRSの実力を証明した。楽器、楽譜の展示ブースの数は、米国勢の展示が減ったせいか昨年の60社からやや減って53社、130人。これに、ジュニア・プレイヤーたち110人を加えると参加者数合計は8600人に達したことになる。

## 英国バーミンガムで開催！

1000〜1300人を集めるIDRSだが、昨年7月のユタ・コンファレンスでは不況の影響とアクセスの不便さもあって824人に減少した。今回は英国開催にもかかわらず、ユタを上回る参加者数を得たことは特筆に値する。コンファレンス・ホストはバーミンガム・コンセルヴァトワールのオーボエ教授ジョージ・ケイアド、事務局長は「IDRS 2009チーム」の統括者でオーボエのクリストファー・カルヴァート。

日本からは、菅原陣（日本バーストン協会会長）、JBS、山上貴司（同事務局長）、岡本正之（都響首席バーストン） 鷲宮美幸（pf） 蓼科バーストン・カルテット・プラス・ワン（TBQ plus One）の小林慧巳、野村和代、島岡幾代、竹内文香、植松さやか、「世界初演コンサート」で自作「Tisarana」が演奏された作曲家の松下功、「アレキサンダー・テクニク」の講演を行ったロンドン在住のヨシ・イナダ、米国ノースカロライナ州で木管楽器工房を主宰する山下富美子の諸氏が参加した。これに、一般ファンを加えると日本人参加者数は推定25名に達したものと思われる（JBS理事長の霧生吉秀氏はコンファレンス直前に風邪に罹り参加を取りやめた）。

多彩なプログラムは、初日を除き午前8時から始まり、夕方あるいは深夜まで11の会場で一斉に進行する。すべてを見ることは当然不可能である。参加者は、興味あるプログラムを選んで各会場を巡ることになる。プログラムの内訳は、オーブニング・ガラコンサート（1）、オーブニング・レセプション（1）、世界初演コンサート（1）、リサイタル（16）、マスタークラス（13）、レクチャー（10）、リディング・セッション（11）、アレキサンダーテクニク、理学療法でみる演奏中の筋肉の動きの観察などの特別講座（3）の計55。これに平行してIDRSヤングアーティスト・コンペティション（バーストン部門）、フ

エルナン・ジレ ヒューゴ・フォックス・オーボエ・コンペティションの2つのコンクールが行われた。



ガラコンサートに出演した米国バーストン界の重鎮ジョン・ミラーとロンドンフィルのG.ニューマンの両氏。



左から山上、イシカワ、香港のオーボイストYiu Songlam、菅原の各氏。博物館での歓迎レセプションで。



ヤング・アーティスト・コンペティション優勝者のLola Descoursさん（フランス）。



菅原陣氏のマスタークラス（通訳はIDRS評議員でコロラド大Bn教授のヨシ・イシカワ氏）。



TBQ plus One。演奏会場のBMIで。



リハーサルでの打ち合わせ。松下功氏とナンシー・キング。



著名指揮者との協演や人気CDも多いキム・ウォーカー（シドニー・コンセルヴァトワール学部長）。



松下功作曲の「Tisarana」のリハーサル。左からナンシー・キング、鷲宮美幸、岡本正之の各氏。



1988年生まれのオーボエのRamon Ortega Quero。バイエルン放送響首席。モーツァルトの協奏曲で完璧な演奏で喝采を独り占めにした。

IDRS Report  
Conference

●フェルナン・ジレ ヒューゴ・フォックス・オーボエ・コンペティションのファイナリスト

トイ Christopher Bouwman (オランダ)、Jung Choi (韓国)、Heather Peyton (米国)、Lin Qing (中国)

コンサート会場のバーミンガム・タウンホール。

主会場のバーミンガム・コンセルヴァトワール



バーミンガムのニュース  
トリート界隈の街並み。

●日本人出演者の記録  
7月21日「緊張・弛緩を自在に駆使して身体と心のバランスをとる」アレキサンダー・テクニク」の講師ヨシ・イナダ氏が日本人の先陣を切って登場。21日にプレゼンテーション、22日に1人30分のマンツーマン・レッスンを行った。  
7月22日「蓼科バズーン・カルテット(TBQ)」が世界デビュー・リサイタル。「世界初演コンサート」で、松下功作曲の「(Irisana)」を、岡本正之(都響首席b♭、鷺宮美幸(b♭)がナシシー・キング(b♭)と演奏。  
7月23日「山上貴司(b♭)リサイタル。ピアノ伴奏は鷺宮美幸。  
7月24日「菅原暉が公開パネル・ディスカッションに参加。  
7月25日「欠席した霧生吉秀JBS理事長の代わりに菅原会長が急速マスタークラスに出演。通訳はヨシ・イシカワ(I D R S 評議員/コロラド大学b♭教授)。「イシカワさんからの突然の要請だったので固辞したが、結果的に英国、スコットランド、シンガポールから参加した3人の若い女性バズーン・リストたちに『姿勢』を教えることになった」(菅原)。

7月22日午後、本部から徒歩3分の距離にある小説家チャールズ・ディケンズゆかりのB M Iで「TBQ plus One」が世界デビューを飾り劇的な成功をおさめた。  
カルテットのメンバーは、小川慧巳(京都フィル)、野村和代(愛知室内オーケ)、島岡幾代(フーリ)、竹内文香(愛知県立立大)の4人。全員が愛知県立立大卒。在学中も卒業後も、室内楽の指導を受け続けている練度のきわめて高いカルテットである。今回はキーボードに植松さやか(京都芸大作曲科卒)を迎え、「TBQ plus One」と「JBS」とI D R S出場審査委員の満場一致の推薦を得てI D R Sデビューを果たした。  
プログラムはすべて中川氏の編曲作品。持ち時間1時間のプログラムを、J・S・バッハの「Suite #3, BWV-1009」(Partita II, BWV-1004-The Chaconne) M・ロレットの「Le Phenix」のe曲で構成した。コンサートの趣旨は、中川氏がI D R S参加者に呼びかけた次の英文によく表れている。



演奏会場でのTBQ plus One。

### 劇的な世界デビューを飾った 蓼科バズーン・カルテット・プラスワン (TBQ plus One)

I loved my bassoon, and had music I wanted to play with it. So I started writing scores, like having a little

secret garden in the backyard. Now, I'm so glad to see these 5 young ladies bringing their own seeds and having them in full bloom, in my little garden. To our secret garden, you're cordially invited.  
《Suite #3, BWV-1009》は無伴奏ソロ組曲第3番のe小調

楽章をバズーン・カルテットのために編曲した。《Partita II, BWV-1004-The Chaconne》は無伴奏ヴァイオリンのために書かれた5つの楽章を2本のバズーンとキーボードに編曲した。《Le Phenix》の原曲は、e楽章から「Le Phenix, Concerto for 4 basses」。ハリ国立図書館所蔵の原譜を参考に中川氏がイメージレーションを駆使してTBQ plus Oneのために編曲した。いずれも、世界中のバズーンプレイヤーの貴重なレパートリーになる楽譜である(出版準備中の曲目リストは別紙参照)。

今回は、ローランド社製の「電子チェンバロC-30 (Digital Harpsichord)」が同社の厚意で提供された。調律不要、持ち運び自在の使いやすさ、各種ピッチへの対応、美しいデザインなどが演奏者と聴衆双方から高い評価を得た。昨年3月に発表されたばかりの「C-30」にとっても、このコンファレンスは世界のクラシック音楽界へのデビューの一つの場となった。

TBQ plus Oneのデビューの成功は、関係者の間では訪英前からじゅうぶん予測されていた。先年「I D R S」機関誌「The Double Reed」の書評欄で絶賛されたリョウヘイ・ナカガワの編曲のコンセプトと併え、高度の音楽性とテクニクを誇る5人の練度には確固たるものがある。

### IDRS Report Conference



JBS事務局長の山上貴司、アレキサンダー・テクニク講師のヨシ・イナダのお二人。



コンファレンス・ホストのG.ケイアドさん。



パブで見つけた、もう一つの「パイパース」!



日本勢が足繁く通ったパブ「The Wellington」。



ジャズセッション。バズーンはM.ラビノウィッツ。



「The IDRS 2009チーム」を率いるクリス・カルヴァートとTBQチームの面々。向って左からYoshino、小川、野村、クリス、竹内、植松、島岡、榎戸の各氏。



左からTBQの野村、IDRSのバズーン・エディターのR.クリムコ、テキサス工科大教授のR.ミーク、TBQ島岡の各氏。



BMI創立時に資金を提供し16代館長でもあった作家チャールズ・ディケンズ(1812-1870)胸像。



左からMrs.ストーチ、松下作品と山上氏の伴奏者として活躍したピアニストの鷺宮美幸、IDRS名誉会員でカナダから参加したG.コーレイの各氏。

Philippe Tondre (フランス)  
5人。

結果は1位 = Philippe Tondre 2位 = Christopher Bowman 3位 = Lin Qing 特別賞 = Jung Choi, Heather Peyton 5位。

●IDRSヤングアーティスト・コンペティションのファイナリストは、Sophie Darigalongue (フランス)、Lola Descours (フランス)、Andrew Partison (米国)の3人。優勝者はLola Descours。

「久しぶりにフレッチ・バズーンを聴けると期待したが、全員がドイツ式楽器で演奏した。1位のLola Descoursは、しっかりと音と安定したテクニクでひとときを優雅、バロック、クラシック、近代の各スタイルの様式に見事に対応した演奏を披露した。翌日の優勝者コンサートでの演奏も安定していた。2位のSophie Darigalongueは大柄の美人で、柔らかな音色が魅力だったがサンサンスのソナタの第2楽章の暗譜に失敗したのは残念だった。3位のAndrew Partisonは堅実な演奏だったが、音、テクニクともに表現の幅が狭く音楽の広がりを感じられなかった」(菅原暉)。



つたからだ。しかしメンバーたちに心配がまったく無かったわけではない。「たとえ一流プレイヤーの演奏であっても、メイン会場から離れた会場には人はあまり集まらない」というジントクスのことを知っていたからである(昨年ユタ・コンファレンスでは米国のメジャーオーケストラのプレイヤーがデュオを演奏したにもかかわらず、聴衆は僅か10人足らずに終わったという例があった)。

加えてパーミンガムの気候は変わりやすく、しばしば驟雨に見舞われる。にわか雨が降れば客足は間違いなく落ちる。メンバーたちは英文のチラシを大量にコピーして初日の会場受付に立ち、あらゆる人に手渡して勧誘に努めた。1時間に及んだチラシの配布は無駄ではなかった。



TBQ演奏会場のBMI。

ではありません。でも、パブロ・カザルスは「バッハはどんな楽器でも演奏することができると言っていた。私は、カザルス音楽祭ほかで長年彼と一緒に演奏したが、バッハの普遍性を遺憾なく顕わした今日の演奏をカザルスが聴いたら、さぞ喜んだことでしょう。本当にそう思ってます(I really think so)と回繰り返す)。Cantata #147のピアノリストが素敵でしたね。Very lovely, very



TBQ plusOneを絶賛したライラ・ストーチ女史。

Impressed. 人生で、このような得がたい経験を味わうことは少ないものです。このホールに連れて来られて幸せだった。これほどいい演奏が聴けるとは夢にも思っていなかった。よくぞ誘ってくれました。この5人には素晴らしい未来が拓かれています。どうか、このまま続けてほしい。続けることが大切なことです。そして、世界のいろいろな場所で演奏して下さい(通訳協力=山下富美子)

編集部註1 ライラ・ストーチ (Laila Storch) カートイス音

関係者の危惧をよそに、聴衆の数は50人を超え、ジントクスは破られたのである。その中の一人IDRS名誉会員で、米国のオーボエ界の大先輩であるライラ・ストーチ女史(Mrs. Laila Storch)は、終演後5人のメンバーに歩み寄って演奏を激賞し、40分あまりにわたって暖かい言葉で激励した。

楽院でマルセル・タビュトリーオーボエを師事。ヒューストン響首席(1948, 1955)。カザルス音楽祭にも7回参加した。インディアナ大客員教授。ワシントン大、シアトル大名誉教授。IDRS、フランス・オーボエ協会名誉会員。録音・著作多数。2008年インディアナ大学出版部から師の伝記「Marcel Tabuteau」(全594ページ)CD付き)を上梓した。

註2 リチャード・ミーク (Richard Meek) テキサス工科大学のバスーンと楽理の教授。客席最後列に立ち尽くしたまま聴き入り、終演後「Terrific, terrific! (素晴らしい)」を連発してメンバーを感激させた。後日、氏からTBQに送られてきたメールの一文。

「パーミンガムでTBQ plus Oneの演奏を聴いて実に幸せだった。なんと素敵な才能に溢れた若いグループであることか! 5人が、自分たちにミュージシャンシップを伝え、分かち与えてくれた恩師のリョウヘイ・ナカガワに献身的に忠実であることが手にとるように伝わってきた」

※2010年のIDRSコンファレンスは6月22日~26日、オクラホマ大学で開催される。  
http://www.idrs.org/

■ BACH/NAK LIBRARY Arr.by Ryohei Nakagawa ■

パイパーズで出版準備中の曲目リストの一部です。2009年9月現在未出版です。出版次第、随時誌上で案内します。

Bassoon Quartet

Series Number	Composer	Title
B.N.L.-1001	J.S.BACH (1685-1750)	Suite #1, BWV-1007
B.N.L.-1002	J.S.BACH	Suite #2, BWV-1008
B.N.L.-1003	J.S.BACH	Suite #3, BWV-1009
B.N.L.-1004	J.S.BACH	Suite #4, BWV-1010
B.N.L.-1005	J.S.BACH	Suite #5, BWV-1011
B.N.L.-1006	J.S.BACH	Suite #6, BWV-1012
B.N.L.-1007	J.S.BACH	Tempo di Bourrée & Double, BWV-1002/IV
B.N.L.-1009	J.S.BACH	Violin's Andante, Choral & Menuet I, II BWV-1003/III, 1006/IV
B.N.L.-1023	S.Joplin (1868-1917)	The Entertainer, 1902

Bassoons + Keyboard (Piano / Cembalo Synthesizer)

TRIO (2+1)

B.N.L.-2001	J.S.BACH (1685-1750)	Partita II, BWV-1004 -The Chaconne-
B.N.L.-2002	F.Schubert (1797-1828)	Sonata "Arpeggione", D-821

QUINTET (4+1)

B.N.L.-2008	M.Corrette (1709-1795)	"Le Phénix", Concerto pour 4 Basses
B.N.L.-2009	J.S.BACH (1685-1750)	2 CHORALS, Cantata #146/ #147
B.N.L.-2010	J.S.BACH	Presto - 1731 SINFONIA, Cantata #29

Bassoon - BAND

B.N.L.-3001	J.S.BACH (1685-1750)	Sinfonia, BWV-826 / II (2+10+1+D.B)
B.N.L.-3002	J.S.BACH	Concerto #2+3, BWV-1042 / 1054 (2+5+1+D.B)

PIPERS Magazine

(株)杉原書店 〒104-0031 東京都中央区京橋2-1-4 第2荒川ビル5F  
電話: 03-5205-3666 FAX: 03-5205-3667 e-mail: order@pipers.co.jp

ストーチ女史インタビュー  
「Very special, very special!!!」

強い印象を受けました。編曲も演奏も素晴らしい。音色と音程が優れている。特に高音域の音程が良かった。全員が長時間吹いてもバテないアンブシユアで演奏していましたね。ス

テージ・マナーも立派で、終始気持ちよく聴き入ることができた。5人を教えた先生が非常に優れている。私は、リョウヘイ・ナカガワに会ったことはないが、リチャードはよく知って

いるようですね(後註2を参照)。プログラムは、やや軽い曲をバランス良く付け加えて実によくできていて、聴く人を飽きさせない(アンコールに演奏した「Cantata #147」も「Rubber Duckie for 4 bns」を指す)。世の中には「バッハをアコーディオンやギターで演奏するのはどうか?」という人もいない

Roland  
WE DESIGN THE FUTURE

バロックの優雅な調べをリビングで。現代の楽器として甦った、最先端のチェンバロがここに。

伝統ある角形のチェンバロ「バージナル」をモチーフとした、ローランド・クラシック・シリーズ 電子チェンバロ C-30。チェンバロ本来の繊細な音色に、デジタルならではの演奏性や表現力も実現した、ローランドこだわりの逸品です。



ROLAND  
CLASSIC  
C-30  
Digital Harpsichord

ローランド株式会社 本社工場: 〒431-1304 静岡県浜松市北区細江町中川2036-1  
●製品資料のご請求は住所、氏名、年齢、職業をご明記の上、〒433-8118 浜松市中区高丘西4-7-19 ローランド(株)お客様相談センターまで。なおご記入いただいた個人情報につきましては、弊社規定に基づき適切かつ慎重に管理いたします。  
ローランド・クラシック・シリーズWEBサイトはこちら <http://www.roland.co.jp/classic/>

C-30 オープン価格  
※椅子は別売りです。  
専用固定椅子 BNC-29  
税込価格 ¥18,000  
(商品価格 ¥17,143)



IDRS Report  
Conference